こいけものがたり　善三郎翁記

(十一) 小池木材株式会社に社名変更

高岡市に、日本曹達㈱高岡工場があった。戦争中の軍需工場で、戦後になり、経済力集中排除法施行の第一陣に指定され、強制分割となった。東京本社の日本曹達は高岡工場ほか一、二工場のみに分割された。新しく発足した新日本曹達㈱本店の常務に、河村某氏が就任した。

太北木材㈱も、新発足して間もない或る日、日曹高岡工場から、新会社発足祝賀の招待を受けた。宴会場に行くと正面に、新・河村常務が、デンと座っていた。雑談が戦争中のことに移ると、河村常務は座り直して、私に「私は戦時中、日本曹達高岡工場の工事次長として勤務していました。次長の職務として各種資材調達の為ほとんどあらゆる統制会社に行きました。木材についても、工場拡張に伴う木材手当に、随分と手を焼きました。富山の日木社・地木社にも随分お伺いしました。たいへんに失礼ですが、私達が行くと乞食扱いにされた幹部もお出でした。賄路・リベート・接待を平気で強要する人達も随分とありました。その中に在って、貴方だけは、超然と何時も親切に、私達を指導して頂き、賄路・接待も強要された事は一回も無く、何時も立派な者だと、私の頭の中に残っている唯一の人でした。本日も、当時の工場への資材購入関係者としては、貴方お一人を、当時の感謝の意を含めてご招待した訳です。風評に依りますと、貴方の方も、日木社太平木材と二度に渡る閉鎖機関に指定、今般、第二会社として、太北木材㈱経営との事、種々ご苦労もあるかと思います。今日の私の立場で、若しお手伝い出来る事がありますれば、遠慮なく申出て下さい。全力を尽くします。」と丁寧に申し渡された。

私は余りにも丁重な挨拶に戸惑ったが、「お礼はお礼」

「お願いはお願い」と割り切って協力方を頼んだ。「私の会社は現在富山市木場町にあります。旧富山地木社から工場を買収しましたが、将来拡張しようとすると、私の工場の周囲は全部、旧日本曹達の富山製鋼所の敷地になっています。お言葉に甘える様ですが、もし不要の土地があれば、ご譲渡願いたい。」と、申し入れた。河村氏は「一寸待って下さい。」と、早速その場で電話を取り、旧富山製鋼所の市川工場長を呼び出し、種々事情を聴取していたが、私の方を振り向いて、「木場町は、戦時中将来工場の拡張予定地にと、買い求めて置いたものです。終戦の今日では、全く不要と思います。木場町一帯の富山製鋼所の所有地を全部、太北木材㈱に譲渡しなさい。」と、本店常務として、市川工場長に対し、半ば命令的な発言であった。受話器を置いてから補足説明があった。「旧富山製鋼所は、木場町の土地を含めて、全部ＧＨＱの凍結資産に編入されているとの事です。私は帰京後、早速東京で、解除申請書を出します。許可後は直ちに貴社にお譲りする事を確約します。」と、好意ある回答であった。約一ケ年後、ＧＨＱから解除許可が下り売買契約をした。当時の工場の周辺約千坪程度であったと思う。許可が遅れたお陰で、私も資金的にはおおいに助かった。

以上述べた通り、銀行の問題、隣接土地の問題等、予期しなかった多数の協力者のご援助・ご後援を得た、第二会社太北木材㈱の滑り出しであった。日木社村上社長から「市井の闇屋材木屋に、成り下がるな！」と、大喝されたことも、「玄海難の大嵐を、乗りきれ！」と、父に激励された意味も、亦、父が常に口にしていた「善因善果・悪因悪果」の教訓も、今にして、暫く、解ったような気がした。

しかし、平担な道程だけでは、決して無かった。会社発足直後、昭和二十四年のインフレ退治の「ドッヂ・ライン」の強行による大不況。昭和二十五年の朝鮮事変による激動等、全く波乱の経済界を、嵐にもまれる木の葉のように揺られながら、どうにか、航海を続けていくことになる。

木材統制法の保護下にあった地木社・日木社や、株式が上場され全国的な組織下にあった太平木材㈱から離れ、全く孤立無援の下での太北木材㈱の発足であったとも言える。社員一同が一丸となって、先発組木材業者に「追いつき、追い越せ」をスローガンに「火の玉」の突進であった。

昭和二十六年に、吉田首相により、対日平和条約が調印された。世代は「最早、戦後ではない。」「平和な、経済大国としての、平和日本建設に邁進しよう。」と、言う合言葉も、どことなく一般に流布される時代に、どんどん移り変わっていった。

経済力集中排除法によって、財閥解体、分業分割された各企業も再び、合併・併合等の気運が起こり、戦前のような大企業に、次々と盛り上がっていった。第二会社として発足した全国各地の旧太平木材㈱の残党会社も、情けない事に優秀な総括指導者が居ないため合併・併合どころか毎年一、二社ずつ姿を消し、全国に四十三社もあったのに、昭和二十六・二十七年頃には、当社一社のみが生き残った。もはやＧＨＱも無く、木材統制も完全に解除になり、全く自由競争の時代となった。

戦後から、昭和五十六年の今日まで数回に渡り、我が国は大激変した。その第一回の変動期は、昭和二十年代末頃までに終わりを告げて、三十年代当初に向かって、新しく経済大国建設に向かってスタートした。太北木材㈱も、新時代に即応すべく、更に社名を変更した。昭和二十八年十二月三日、小池木材株式会社と社名を変更した。小池木材㈱として、自由競争に打ち勝つべく、経営の責任態勢の確立を一般に公表したのである。昭和二十九年の新春に向かって、新発足し、今日に至っているのである。